



『新しい東京』の 都市づくりに向けて

東京土木施工管理技士会 会長
飛島建設株式会社
代表取締役会長

伊藤 寛治

2018年の新春を迎え、謹んでご挨拶を申し上げます。

会員の皆様には、平素より技士会運営にひとかたならぬご理解とご協力を賜り、誠に有難く厚く御礼申し上げます。

この一年を振り返りますと、近年、全国各地で頻発化・激甚化している地震や集中豪雨などの自然災害に対し、国民の生命財産を守り、安全安心を確保する防災・強靱化対策を進めて行くことの一層の重要性・緊急性が叫ばれた年ではなかったでしょうか。そして、今、建設業はインフラ整備の担い手として、ひいては日本経済の持続的な成長を支える産業として期待されています。

一方、建設業の好調ぶりが喧伝された年でもありました。確かに建設需要が比較的良好な状況ではありますが、そこには地域差、企業間格差が歴然と現れており、益々深刻化する担い手不足と相まって、建設各社どこでもが万全の態勢で今後の建設需要に対応できる状態とは言えません。そこで我々技術者に求められていることは、まずは生産性向上のために知恵を出し、汗を流すこと、そして若年層や女性といった新しい時代の担い手を確保するために建設業の魅力を発信し続けることだと思います。土木の技術者こそが真の3K、つまり「協力・感動・貢献」を体現できるのではないのでしょうか。

技士会としては、今年度の事業計画でありました各種講習会や見学会の開催など皆様のご協力を

得ながらこれまで順調に進めてまいりました。来る2月には業界研究フェスタも行う予定です。会員の皆様におかれましては今後ともご協力を賜りたく宜しくお願い申し上げます。

日本全体を2020年以降も活力ある社会とするためには、首都東京がその推進力として持続的に発展し続ける事が不可欠であり、その原動力として我々土木技士が必要不可欠の存在であることは間違いありません。

ラグビーWCまで2年を切りました。オリンピック・パラリンピックも既に1000日を切り、あつという間に開会式の日を迎えることになるでしょう。そして勿論これら世界的イベントへの対応はもとより、新しい東京には強靱化、快適化の為になすべきインフラ整備・維持更新が山積みです。技士の皆さんの力を発揮する場であり、その真摯な建設人としての姿を表現できる舞台でもあります。皆様が素晴らしい仕事をされることを心より願ってやみません。

最後になりますが、今年も会員の皆様方のご健勝とご活躍を祈念申し上げまして新年のご挨拶とさせていただきます。





東京土木施工管理技士会 副会長
戸田建設株式会社
常務執行役員土木工事統轄部長

山田 裕之



東京土木施工管理技士会 副会長
清水建設株式会社
常務執行役員土木東京支店長

杉原 克郎

現場の週休二日の実現を！

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

建設各社の業績は好調さを持続しています。首都圏を中心に多くの仕事量があり、その一方で社員不足、担い手不足が、より深刻化しています。世間も建設業界も「働き方改革」「生産性の向上」が強く求められています。

当技士会も、一昨年に設立20周年を迎え、各記念事業を実施し、一区切りつきました。新たな気持ちで、当会発展のために尽力しているところです。

「働き方改革」の取組み課題のひとつに、現場の週休二日の実現があります。私は、ゼネコンの内勤管理職であり、ほぼ確実に週休二日を確保できます。一方で、現場の社員の実態は、日曜日は休めるものの、土曜日をすべて休める人は、ほとんどいないのが現状です。現場も確実に、土曜・日曜と休める、週休二日の実現が望まれています。

現場の週休二日の実現の一番の課題は、工期・工程です。休めない理由を集約すると、そこにたどりつきます。そして、週休二日の実現に最も大切なことは、発注者、建設会社、協力会社の三者が、強く「現場の週休二日の実現」を願い、その達成のために一致団結し連携することだと思えます。そして、それぞれの立場での課題を挙げ、その解決策を展開することです。

たとえば、発注者は適正な工期の設定を行う。それに見合う工費を算定して発注する。建設会社は、十分な、設備、機械、手順を検討した施工計画のもと、効率よく無駄なく施工を進める。いわゆる生産性の向上の実現です。協力会社は、土曜・日曜と休んでも、現場で働く人たちが満足できる賃金を得られるように、月給制への移行を行う等…です。

建設業に携わるすべての人たちが、強い気持ちで、それぞれの課題を解決し、現場の週休二日の実現を達成しましょう。建設業の魅力化のため、将来の技術者、技能者の確保・育成のため、現場の週休二日の実現がとても重要です。会員の皆様の積極的な活動と、ご理解・ご協力をお願いいたします。

最後に、会員皆様のご発展とご健勝を心から祈念して、新年のご挨拶と致します。

施工管理という仕事の矜持と責任

2018年の新春を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

去年は、日本の製造業の信頼を揺るがす品質不正の問題が広がりを見せ、我が国のものづくりのあり方が問われる事態となっています。我々建設業に従事しているものにとっても、品質の確保は発注者及び得意先、ひいては国民に対して、もっとも重要なものといって過言ではありません。品質が担保されていないものを納めることは、第三者を危険に晒すだけでなく、長年築き上げてきた信頼を一瞬で失うことにつながります。

特に建設業は、プレキャスト化が進められてきてはいるものの、現地による一品生産となるものが多く、その場その時における施工管理、検査が品質を確保する上で非常に重要です。そのため、施工管理の責任は重大ですが、それはやりがいでもあると言えます。しかし、インフラは、恩恵を受ける多くの人にとってそこにあって当たり前存在と思われていることが多く、造りあげているのが我々土木技術者であるという認識が少ないことは否めません。

「暮らしのそばに、じつはドボク。」弊社の土木広告に使用しているコピーですが、まさにこうしたことを多くの人に知ってもらうことができれば、我々の仕事が理解され、働き甲斐も生まれ、担い手を確保するための一助になるのではないかと思っています。

当会においても、昨年、夢を持てる建設業、魅力ある建設業を目指し、ハッ場ダムをはじめとする技士会主催の現場見学会や、合同企業説明会、各種技術講習会を開催しました。

これらを通して、施工管理という仕事の大切さを理解してもらおうと共に、働く人のやりがい、楽しさをPRできればと考え、今年も引き続き、建設業への理解促進、若年技術者の確保・育成等に向けた活動をしていきたいと考えております。

これらの活動を推進するためには、会員皆様のご理解とご協力が必要です。今後ともより一層のご支援をお願いいたしますとともに、会員の皆様のご健勝とご発展を祈念致しまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。